のそれぞれに及んでゐる。

＊　＊

なほ本書卷末には附錄として「東亞古代美術綜說」一篇が加へられてゐるが、これは總長となられるまで二年間に亘り續けられた先生最後の、我々には最も思出深い講義の草稿である。それは先生の廣い學的見地から、それまでの個々の研究が要約大觀せられたものであるが、總括的にして且客觀的ならん事を期せられる先生の御意圖がこゝではいよいようかゞはれ、支那古代の彩色土器より玉器、銅器、スキタイ文物の影響、更に漢代の彫刻繪畫に及び、又佛教傳來前後の美術に關する諸章は本文二十三篇の諸論攷を補ひ、それらの占める全體的意味もこゝに益々明かとなる次第である。

類書の少い支那古代美術について、先生のこの御遺稿の如きが公にされた事は後學にとつて大きな幸ひであると云はなければならない。

〔岡田芳三郎〕

支那佛教史研究（北魏篇）　塚本善隆著

昭和十七年十月　弘文堂書房發行

A5判本文六五四頁索引二八頁　定價拾圓

昨年秋、殆んど時を同じくして、支那佛教史關係の著作二つが學界に提供された。一つはこゝに紹介せんとするもの、今一つは山崎宏氏の勞作「支那中世佛教の展開」である。後者に就ても、いづれ紹介の筆をとりたいと思うてゐるが、在來の支那佛教史關係の著作と頗るおもむきを異にしてゐることは二者に共通することで、このことは、そのまゝ斯學研究の躍進を意味するものでなくてはならぬ。而して、支那佛教史研究の最近に於ける急速な進展は、一般史學の潮流に卽して、一般史への認識を背景に、教團史的事象が解明され、併せて教理方面にも歷史的現實に卽した研究が進められたが爲めに外ならぬ。

著者塚本氏は、支那佛教史研究のかうした發展過程にあつて、眞摯な學的態度と鋭敏な感覺を以て、一文を草する毎に、必ず新分野を開拓し、斯學の動向に先鞭を著けられつゝある。

さて、本書は氏の研究に於て重要部分を占むる北魏佛教に關する論作十篇を集めたもの、うちに未發表　篇を含むも、他は既發表のもので、斯學研究の驥尾に附く筆者にとつては、いづれも再讀三讀、以て多くの示唆指導を得たなじみ深い論作ではあるが、かうして一册にまとめられると新な學的馥氣を感するや切である。

（一）「魏晉佛教の展開」……序說とも云ふべき一篇、支那の佛教受容の樣相を發展的過程に於て把握されてゐる。卽ち、後漢の神仙方術的佛教が、魏晉時代古典の學を生命とする貴族社會に受容されて、道家的佛教・格義的佛教と展開し、然もそれがやがて漢族僧道安によつて、佛教は佛教として理解し實踐すべきであると云ふ本然の立場への自覺反省となつて來たことを、西方からの佛教諸思想の傳入と睨みあはせつゝ明快な論理を以て證明されてゐる。北魏國家の先蹤たる五胡の諸國に於ける問題が、充分論じられてゐない憾みはあるが、佛教の展開を支那思想・支那社會の潮流に合して把握せんとする筆者の意圖は明瞭に認められる。（二）「北魏建國時代の佛教政策と河北の佛教」……これより本論には入ると云ふべく、文中、胡族國家たる北魏が北支那に勢力を伸張し行く線に沿うて、同國内の佛

教が隆昌になつたこと、從つて太祖太宗時代既に國家と佛教との關係が密接であつたことを論證されてゐるが、著者が云ふ佛教政策は、既に存する佛教或は佛教々團に對する爲政者の打つ手であつて、國策のうちに躍る佛教の役割は、比較的に等閑に附されてゐると思ふのは、筆者の見誤りであらうか。(三)「北魏太武帝の廢佛毀釋」胡族國家たる北魏に支那的文化が進出してゆく過程、換言すれば、北魏國家の漢化し行く過程に於ける出來事として、太武帝の廢佛を考察されたもので、從つてかゝる觀點より、廢佛の主謀者は道士寇謙之ではなくて實は漢人宰相崔浩であると論斷されるところ、筆者の最も敬服するところであるが、胡族國家特有の强力な君主權の制壓下にある佛教が、若しも反國家的面をもち、又はもつと爲政者より認められた場合には、强力な君主權は直ちに發動されて、彈壓の鐵槌が下るのは當然である。著者も言及されてゐることではあるが、北魏の廢佛を考察する時、かうした胡族國家の性格を忘れてはならぬ。殊に同時代江南漢族國家に於ては、佛教が國家的制約外に存在し得たことを併せ考へる時、更にその感を深くする。(四)「沙門統曇曜とその時代」……これ新發表の一篇、太武帝廢佛後、名僧曇曜が沙門統として全佛教界を牛耳つてゐた時代の隆昌な復興佛教が、文明皇后を中心とする北魏國家の絶大な外護の下に展開されたことを指摘されてをり、北魏が永遠に誇る佛教美術の淵叢雲崗石佛の裏付けをなす一文である。(五)「北魏の僧祇戸佛圖戸」……北魏が佛教々團に與へた物的保護、換言すれば、隆昌な北魏佛教の經濟的基礎を究明されたもの、支那佛教經濟史研究には必讀の一篇である。(六)「雲崗三則」……關野・常盤兩博士共著「支那文化史蹟」第一輯解說の批評で、考證極めて精緻、北魏佛教に造詣深い著者でなくてはなし得ないところである。(七)「北魏の佛教匪」……北魏に現はれた佛教匪を年代順にとりあげてその性格・背景を解明されたもの、著者が、教養のない支那の愚民社會が匪賊蜂起の溫床であることを指摘して、匪賊絶滅の方策は、支那に於ける政治教育の偏頗性・偏在性・固定性を導いた所謂儒家流經營を追放し、科學的教育を普及するにあると主張されてゐるのは、胸のすくやうな卓見であつて、爲政者の直接參考とすべきことであらう。(八)「支那在家佛教特に庶民佛教の一教典」……北魏に出來た僞經「提謂波利經」を素材として支那庶民佛教が道教的佛教であつたことを論斷されたもの。(九)「龍門石窟に現れたる北魏佛教」二百五十頁に亙る勞作、洛陽奠都時代の北魏國家によつて造營された龍門石窟の研究で、夥しい造像記・石窟の樣式造像の表現など、多種多樣な材料を縱橫に驅使して歸納的に論を進め、北魏前半時代の雲崗石窟が「釋迦は如何にして佛になつたか」を現してゐるに對して、龍門石窟は「釋迦佛は何を說いたか」を示してゐるものであると、巧妙な表現を以て結論され、そして、それはやがて支那佛教徒の如何にすれば救はれるかと云ふ志求となつて、支那佛教諸宗派特に淨土教の發達を促すに至つたと、鮮かに論陣を張られてゐる。(十)「支那淨土教の展開」……北魏末に出た曇鸞淨土教の史的意味を究明されたもの。

右の如く、本書に收められるゝ十篇は實は夫々獨立した論作であるが、然もすべてが有機的に聯關されてをり、且ほゞ年代的に配列することによつて、北魏佛教の史的流動が浮き出されて

るるばかりでなく、教理方面からさては佛教の美術經濟社會等あらゆる部門に亙つた多彩さによつて、北佛魏教の全貌が巧みに表現されてゐて、著者の非凡な努力と博識に敬意を表せざるを得ない。そして、著者が教團の展開のみならず、佛教々理の發展をも、絶えず、文化史・政治史・社會史的事象と關聯せしめつゝ、鮮かに把握されて行く態度と手際とには全く感服の外はない。ひらたく云つて、支那佛教史研究の學徒が必ず出會ふ最大の問題は、教團史と教理史とを如何に有機的に結びつけて行くかと云ふことであるが、本書は否著者の學風は、これに一つの解答を與へられたもので、後進の學徒に多くの示唆を與へられるものであることは信じて疑はない。

なほ、筆者の一言したいことがある。それは、著者の云はれる如く、北魏に於ける佛教のあの隆盛さは、佛教が國家から絶大な保護を受けたこと、換言すれば、國家と佛教とが完全に一致したことによるは勿論ではあるが、他の一面から考ふれば、實は胡族國家たる北魏は國家の精神的紐帶として、佛教を採るべく性格づけられてゐたものであると云ふことである。即ち、胡族と漢族との合作になる胡族國家に於ては、質の異つた兩種の民族を結ぶ最適の精神的紐帶は、支那に發生し發展した儒教道教ではなくて、世界的性格をもつ佛教であつたことを洞察すべきではなからうか。

ともかく、本書が支那佛教史研究の水準を一段と高められた名著たることに誰も異論はあるまい。卷末に附された精細な地圖・索引・書中に散見する圖版は又讀者を益するところ尠くない。

〔野上俊靜〕

宋代茶法研究資料

佐伯　富著

昭和十六年十月　東方文化研究所發行

四六倍判　目次三一一頁　本文九〇一頁

定價　拾八圓

茶法の研究と言へば、文人趣味と連想される關係から、この大いなる時代に於ては、餘りに閑事業であるかの如くに考へられるかもしれない。

然し中國に於いては、現在に於いても茶の有する意義は極めて大であつて、茶商とか茶賊とかゝ、單に經濟界に於て雄飛するのみならず、政治上社會上或は文化上に於ても重要なる役割を演じて居る事は、林語堂や巴金の小説によつてだけでも、十分理解される所である。私が杭州に旅した時も、茶賊の活躍の故に、龍井を訪れる事は出來なかつた。近世史上に、茶貿易が捲き起した波瀾は、言ふ迄もない所であらう。少し誇大な表現が許されるならば、茶法を除外して中國を語る事は出來ないと言へよう。從つて本書が、單に學界のみならず、廣く現代の文化界に贈られた事は、慶賀に堪へぬ所で、著者及研究所に心より敬意を表したいと思ふ。

本書に接して私は先づこの一大巨册に驚かされたのであつたが、然も頁を繰つて行くにつれ、著者の拂はれた努力の大と研究の精に驚嘆し、今更乍ら東方文化研究所の篤學比なき精神に打たれたのであつた。唯學を愛する事のみを喜とする人でなければ、何人がかくの如き、勞苦の多い、そして地味な研究を、完成する事が出來たであらうか。

書名の示す樣に、本書は資料集である。從つて資料輯集の完